

## テレビにおける女性アナウンサーの役割 ：“女子アナ”活躍への批判的検討

東京女子大学現代教養学部  
准教授 有馬 明恵

### 問題

女子大学生にとって、女性アナウンサーは何千倍ともいわれる倍率を勝ち抜いた末にテレビで活躍する憧れの職業である。なぜなら、プロデューサーやディレクター、カメラマンとは異なり、番組の伝え手である女性アナウンサーたちは視聴者にとっても彼女たち自身にとっても番組の「顔」だからである。また、女性アナウンサーは前述のように想像を絶する応募者の中から選抜されることから、美貌と知性を兼ね備えた理想の女性とみなされる。さらに、女性アナウンサーは職業柄、スポーツ選手などの有名人と出会いその結果彼ら著名人と結婚することも多く、華やかな人生を歩んでいると思われている。

一方、女性アナウンサーの略称である「女子アナ」という呼称には、彼女たちに求める資質や役割が反映されていると考えられる。その呼称には、ニュース原稿を読むことだけではなく、多様な番組ジャンルで活躍できること、とりわけ番組中での適切なリアクションが求められており、“アイドル的存在”、“未熟さ”、“女性役割”への期待が込められているのではないか。

以上より、本研究の目的を次の2点とした。第1の目的は、女性アナウンサーがテレビ番組で果たしている役割、とりわけジェンダー・ステレオタイプの有無を明らかにすることである。この目的のために内容分析研究(研究1)を行った。第2の目的は、そうしたテレビでの女性アナウンサーの役割を踏まえ、女性アナウンサーのテレビでの活用のされ方を女子大学生と共に検討することであり、メディア・リテラシーの向上を図ることである。この目的のためにインタビュー調査(研究2)を行った。

### 研究1：内容分析研究

#### (1)方法

**研究対象** NHK、日本テレビ、TBS テレビ、フジテレビ、テレビ朝日の6時から24時に放送された1週間分のテレビ番組837番組、画面もしくは音声で起用されたアナウンサー1,401名であった。

**手続き** 番組の基本項目用とアナウンサー用のコーディング・シートを用いて、4名のコーダー(研究者自身と学部生3名)が独立にコーディング作業を行った。

**分析項目** 番組の基本項目は、番組名、放送局、放送年月日、放送曜日、放送時間帯、(放送時間)、番組ジャンル、男女別アナウンサーの人数であった。アナウンサーに関する項目は、番組名、アナウンサーの氏名、アナウンサーの性別、年齢、経歴、

入局後の在籍年数、役割、キャラクター(言動面での特徴)、上半身の服装、下半身の服装、上半身の服の柄、下半身の服の柄、髪長さ、髪の色、髪型、露出、カメラワーク、カメラアングル、微笑んだ回数であった。

## (2)結果

女性アナウンサーの特徴は男性アナウンサーと比較することでより明白になると考えられたため、男女の比較を行った。

### アナウンサーの経歴に関する結果

アナウンサーの経歴として、年齢と在職年数、アナウンサー歴について検討した。なお、アナウンサーについては同一のアナウンサーが別の番組に登場している場合や異なる曜日の同一番組に登場する場合などはそれぞれ個別にコーディングを行っており、また何度も同じように活用されることは受け手のアナウンサー像の強化につながると考えられるため、それぞれ1回(1人)としてカウントした。

まず、アナウンサーの男女の内訳は、NHK では男性(190名)が女性(124名)を上回っていたが、民放ではどの局も女性が男性を上回っていた。しかし、在職年数においては男性が約15年、女性が約10年、平均年齢においては男性が39歳、女性が33歳と職業キャリアにおいては男性が女性よりも有意な立場にいたことが予想された。また、アナウンサーの経歴においても、キー局の正社員が男女とも最も多いものの、その割合は男性においてより大きく(男性の8割、女性の7割)、「局アナ→フリー」は男性(10.4%)よりも女性(15.9%)が多かった。さらに、フリーアナウンサーの年齢は男性が女性よりも高く、局アナからフリーへの転向者における男性の正社員在職年数は女性のそれを大きく凌ぐものであり、キャリアを十分に積んだ上での独立は男性のキャリアトラックであり、女性はむしろ若年での転身を余儀なくされていると思われる。

### アナウンサーの役割に関する結果

まず、番組内でアナウンサーが果たしている役割そのものについてみてみよう。「メインキャスター」「メインの司会進行」「ニュースの読み手」「音声のみ(ナレーション、実況など)」といった番組内における重要な役割かつアナウンサー職の伝統的な職能を果たす役割において男女差は認められず、好ましいことあると考えられる。一方、男性が女性よりも多かったのは「リポーター」と「スポーツコーナー担当」であり、女性が男性よりも多かったのは「司会進行の補助」と「サブキャスター」であった。「リポーター」のような外へ出ていく仕事、そして「スポーツ」というジェンダーの最後の砦といわれる領域において男性アナウンサーに活躍の場が与えられ、「司会進行の補助」や「サブキャスター」といった補助的な役割が女性アナウンサーに与えられていることは、ジェンダー・ステレオタイプそのものでありステレオタイプの助長につながるとと思われる。

次にアナウンサーがどのようなジャンルの番組に起用されているかをみてみよ

う。男女とも「報道」番組が最も多かったが、その割合は男性(42.7%)の方が女性(31.3%)よりも多かった。「報道」以外で男性が女性を上回っていたのは「スポーツ」バング時(男性 5.4%、女性 1.3%)であった。一方、「情報番組」「バラエティ」「生活」「ミニ番組」では女性が男性を上回っていた。したがって、真面目なニュース番組である「報道」と男らしさの象徴のシンボルである「スポーツ」には相変わらず男性アナウンサーが多く配置され、料理番組に代表される「生活」、報道番組を親しみやすくした「情報番組」、タレントが馬鹿げたことをしたり、楽しみながら知識を増やすことのできる「バラエティ」番組、番組と番組の間の隙間を埋める「ミニ番組」といった、いわば二流以下の番組ジャンルで女性アナウンサーが男性アナウンサーよりも起用されていたのである。つまり、知性とたくましさは男性アナウンサーの特権であり、家庭的であること、アイドル的であること、補助的であることが女性アナウンサーに求められているといえよう。特に、「情報」と「バラエティ」では男性芸能人の司会進行の補助を女性アナウンサーが務めることが多く、女性アナウンサーへは上記の役割が強く期待されているものと思われる。なお、「ワイドショー」での男女の起用率はほぼ同じであった。

また、「報道」番組においては、「メインキャスター」(男性 25.8%、女性 38.3%)、「サブキャスター」(男性 5.9%、女性 4.4%)ともに女性の方が男性よりも起用率が高く、男性は「ニュースの読み手」(男性 31.0%、女性 13.3%)、「音声のみ」(男性 4.1%、女性 0.8%)、「リポーター」(男性 20.3%、女性 9.2%)という役割において女性よりも多かった。また、「スポーツコーナー担当者」の男女の起用率に差はなかった(男性 5.9%、女性 5.4%)。したがって、「報道」番組においては、全体としては男性アナウンサーに活躍の場が与えられているものの、女性アナウンサーが番組内で重要な役割を果たすこと、ジェンダーの最後の砦といわれている「スポーツ」に関わることで男女同等が進んでいるといえる。今後は、個々の番組の中でそうした役割に携わる女性アナウンサーがどのような振る舞いをしているかなどにも注意を払うべきと思われる。

### アナウンサーの言動に関する結果

男性アナウンサーよりも女性アナウンサーに多くみられた言動は、「ほほ笑む」(男性 66.1%、女性 74.4%)、「笑う」(男性 21.1%、女性 38.2%)、「語尾を伸ばす」(男性 15.1%、女性 22.8%)、「相槌を打つ」(男性 40.2%、女性 47.3%)、「挑発的な仕草・発言をする」(男性 0.6%、女性 3.0%)であった。これらは会話の下働きによるジェンダー役割の遂行、性の商品化がテレビ番組の中で行われていることを意味している。

女性アナウンサーよりも男性アナウンサーに多かった言動は、「ボケる」(男性 4.9%、女性 3.1%)であり、バラエティ番組や情報番組などにおいて司会を務めることの多い男性芸能人(その多くはお笑い芸人)と同様の役割を男性アナウンサーが果たそうとしているのではないかと推察される。

## 研究2：インタビュー調査

### (1)方法

**調査協力者** アナウンス職に憧れる学生(3年生女子2名)が進行役となり、1年生女子8名(4名ずつを2回)のインタビュー調査を行った。偶然ではあるが、後者でアナウンス職に憧れている者はいなかった。1回目は2010年2月3日に行われ、進行係2名、回答者4名に研究者がオブザーバーという形で参加した。2回目は2010年2月5日に実施し、進行係1名、回答者4名、研究者1名がオブザーバーとして参加した。

**手続き** インタビューに先立ち、進行係2名と研究者で打ち合わせを行いインタビューの流れと質問項目を決定した。インタビューは、リラックスできる雰囲気を作り、回答者が自由に思ったことや考えていることを話せるように配慮し、1時間30分程度の半構造化面接を行った。インタビューの進行を研究者ではなく学生に担わせた理由は、そうすることで進行係と回答者のやりとりや意見の食い違いから女子大学生が抱く女子アナ像をより明確にすることができ、その結果、自分では気づいていなかったテレビ番組内のジェンダー・ステレオタイプに個々の学生が気づくことをできると考えたからである。

**質問項目** ①女子アナをどの程度意識してテレビをみているか。②女子アナという職業についてどう思うか。③憧れている女子アナ・好きな女子アナはいるか。④女子アナを気の毒だと思ふことがあるか。⑤女子アナについて話をしてみて、気づいたことはあるか。なお、①～④については、それぞれ理由についても尋ねた。

### (2)結果

#### 女子アナをどの程度意識してテレビをみているか

積極的に“意識してみている”と答えた回答者はいなかった。ただし、“好きな女子アナが出ている番組は印象に残る”“好きな女子アナが出ていると無意識にチェックを入れている”というコメントはみられた。このような回答者の発言に対し、進行係は“そういう風になりたいということかな。そうだね”と同意を求めたが、回答者からは“そういう感じではない”という消極的な反応が返された。

また、積極的に女子アナを意識することはないという回答者の反応に対し、進行係のうちの1人は“いい仕事をしている、とても機転が利いていいと思うことはないか”と、女子アナを肯定的に評価しながらテレビ視聴をするという回答を回答者から引き出そうとしていた。そのような進行係の促しに応じ、回答者の中には“声がいい”“賢い”“万人ウケする”などと女子アナに対する肯定的な意見を述べる者もいた。その一方で、“見た目が重要である”“派手である”“気が強い”“ニュース原稿を読むだけならNHKの高校生放送部コンテスト出場の方がよっぽど上手である”などの否定的な意見もあった。

#### 女子アナという職業についてどう思うか

女子アナという職業について、回答者全員が“民放とNHKで異なる”と述べ、NHK

は“伝える人”“原稿を読む人”“ニュース報道に携わる人”“頭の回転が早い”“落ち着いている”“キャリアを積んでいる”“キャリアウーマンという感じでカッコいい”という印象であるが、民放は“タレント・芸能人に類似しており”“クイズの司会者”“新人が多く視聴率狙い”“顔が第一”“美人で男性ウケする人”“自分を主張したい人”“40代・50代の人ほとんどいない”“有名人と結婚してやめる人が多い”“寿退社”という印象が語られた。

また、男性アナウンサーと比較することで、女子アナの特徴を指摘する回答者もあり、“男女でアナウンサーに求められているものは異なる”と明白に指摘する者もいた。どのような差があるかについては、“男性がメインで女性はサポート役”“男性はニュースを読むことがメイン”“女子アナはニュースを読むことにプラスアルファが求められている”という対比が多く述べられた。また、“女子アナはバラエティに花を添える存在”“女子アナには華やかさが必要”であるが、男性は“経験でよい”“キャリアが必要でより高いスキルを求められており”“キャリアを積まないと画面に出てこない”“中身がないとバッシングに会う”といった意見がみられた。さらに、“女子アナは原石を磨かずに使い捨てされている”“芸能界と女子アナの世界は使い捨てという点で同じである”“このようなことは同じ女性として悔しい”という意見も述べられた。

どのような人が女子アナになれると思うかということについては、回答者たちは口々に“ミスコン優勝者”“見た目が重要”と述べていた。そもそもミスコンには“自分に自信がある人しか出ない”“ミスコン優勝者でないと女子アになれる”“〇×大学レベルのミスコンはテレビ局がバックアップをしている”といったことも指摘された。ただし、“美の基準は局によって異なる”と回答者は感じており、“××テレビは華やかでハデ”“△△テレビは自然で楚々としていて綺麗”という違いがあると感じているようだ。

また、“おばかタレントはとっさの判断ができないので番組の進行をできないが女子アナはできる”“頭がよくないと番組の中でおもしろいことは言えない”、その保証をしてくれるのが“学歴”である。そのため“高学歴でネームバリューのある大学”“T大、K大、W・K出身で、特にW・K出身者”が女子アナとして好まれているのではないかと指摘があった。

進行係から、“(ならば)女子アナ(というすばらしい人)を目指して努力をしないのか”という疑問を呈されると、“そもそもなりたいとは思っていない”“地方局のアナならある程度容姿がよければ選考過程で努力(技術面)が評価されるが、面が大切”“芸能界と同じでコネしたたかさがないと無理である”と回答者たちは応じ、進行係と回答者とでは女子アナという職業に対する考え方が全くことなることが露呈した。

さらに進行係から、“では、女子アナのように綺麗で頭がよくて何でもできるという人は、特別な人なのか”と訊ねられると、“特別な人というより別世界の人”“女子アナになれる人はすごい人だとは思いますが、中卒で一生懸命働いている人が女子アナよりも劣った人間だとは思わない”といった厳しい意見が出された。

### 憧れている女子アナ・好きな女子アナはいるか

回答者は口々に好きな女子アナの個人名をあげた。また、好きな理由としては、“落ち着いた感じが好き”“悪い噂を聞かない”“番組を作っていく姿勢がよい”“細くて綺麗”“ほどよいバランスを持ち合わせている”“笑顔がいい”“元気をもらえる”など、仕事ぶりのみならず、外見や笑顔など女子アナに重視され回答者たちが批判していた女子アナの特徴をも挙げていた。その理由として、小林麻央氏を好きだと答えた回答者は、“アナウンサーとしてではなくテレビに出ている女性として好き”答えていた。

### 女子アナを気の毒だと思ふことがあるか

回答者は全員、女子アナは可哀想な人たちであると答えていた。その理由として、“アイドルと同じことをさせられる”“男性タレントからの絡みがウザそう”“テロップつきのNG特集で何度も失敗を指摘される”“あることないこと言われイメージにつながる”などの女子アナがタレント化していること、またそれに伴い大衆の興味関心に晒されることが指摘されていた。

### 女子アナについて話をしてみて、気づいたことはあるか

まず、自分たちのステレオタイプ的な女子アナ観に気づかされたという回答者からの意見があった。つまり、“NHKと民放で女子アナ像が異なり、女子アナといった場合には民放の女子アナを想定している”“女子アナという言葉には軽い感じがする”といった否定的な見解が“女子アナ”という言葉に内包されているというのである。

一方、“女子アナは思った以上にいろいろなことに挑戦している”“女子アナに求められているものは大きい”“女子アナにはタレント性が求められている時代である”“女子アナは顔も重要であるが、縁の下の力持ちでありかつ自分テイストを持ったタレントでもある”“バラエティ番組などでは女子アナは脇役であることが多いが、番組の進行において重要な役割を果たしている”などの女子アナの職域の広さや番組ないで果たしている役割の多さにあらためて気づいたという意見も回答者から出された。

しかし、“アナウンサーの世界のジェンダーは仕方がないことである”が、女子アナに“華やかさを求め”“使い捨てをしている”ことは残念だという意見が出され、女子アナが活躍することがジェンダーの助長につながることを懸念する意見も回答者より多く出された。

### 結論と今後の展望

内容分析研究から、テレビにおける女性アナウンサーの役割を明らかにすることができた。それらの役割とは、男性が求める女性像ではないかと思われる。すなわち、「未熟な女子アナ」イメージや「男性=主、女性=従」というものである。その

ような女性アナ像はバラエティ番組や情報番組など娯楽色の強い番組において顕著であり、アナウンス職における男性と女性の役割の違いを強調し、視聴者、特に男性と女子アナ予備軍のジェンダー・ステレオタイプを強化する可能性がある。

インタビュー調査からは、アナウンサーに憧れる女子大生は女子アナが担っている全てを肯定的に捉え、女子アナに憧れていない女子大生はそれら女子アナの役割をジェンダーの視点から批判的に捉えていることが明らかとなった。女子アナ予備軍の者たちをどう変えていくか、男性が女子アナに求めることをどう変えていくかが、ジェンダーの視点からは重要であると思われる。そのためには、女子アナ自身がキャリアとジェンダーとをどのように折り合いをつけ日々の職業生活を送っているのかということをはっきりと明らかにしていくことも必要であろう。

発表会では、さらなるインタビューの実施、過去のデータとの比較、同一人物の入社後から現在に至るまでの変化について分析することなど、この研究を発展させるのに有用なご指摘をいくつもいただいた。それらの意見を踏まえ、女子アナのジェンダーという問題に今後も取り組んでいきたい。